

長崎市周辺地への移住と宗教コミュニティの形成

叶 堂 隆 三

目 次

はじめに

- 1 本論の目的
- 2 長崎市および半島・山間地・島嶼の地域状況
- 3 長崎市（半島・山間地・島嶼）への信徒の移住と居住の展開
- 4 長崎市（半島・山間地・島嶼）における宗教コミュニティの形成と展開
- 5 長崎市（半島・山間地・島嶼）への信徒の移住と宗教コミュニティ形成

はじめに

長崎市には、戦国時代のキリスト教関係の史跡や国宝の大浦天主堂、信徒発見の出来事等の長いキリスト教の歴史がある。そのため、30を超えるカトリック教会が立地する地区には、戦国時代からつづく信仰の歴史があると思いがちである。しかし長崎市の半島・山間地・島嶼等の周辺地区には、江戸後期・明治以降に営農を目的に移住した信徒に由来するコミュニティが多く存在する。本稿では、長崎市の半島の小榊地区、山間地の小ヶ倉地区大山と深堀地区善長谷、島嶼の伊王島地区を事例にして、長崎市の周辺地域へのカトリック信徒の移住の経緯と定住の状況、宗教コミュニティの形成と展開の解明をめざす。

1 本論の目的

長崎市には、外海地区（2教会・3巡回教会が存在）をのぞいても、表1のように28教会が存在する。長崎市の教会数の多さは、長い潜伏キリシタンの歴史の証しであり、国宝の浦上天主堂やカテドラルの浦上教会等の著名な教会の存在は、長崎市のキリスト教の歴史を物語る。

確かに、浦上地区や外海地区等は、長い信仰の歴

史を有する。しかし、実は、江戸後期以後に信徒が移住した地区が長崎市に多いのである。明治以降、長崎市は工業化が進行し、表2のように長崎市の人口は急増する。そのため、長崎市の各教会の信徒には工業化・都市化の中で長崎市に流入した信徒世帯の系譜が多い。

同時に、長崎市には、営農を目的に移住した信徒世帯の系譜も数多い。本稿の目的は、江戸後期以後の開拓移住地である長崎市の半島・山間地・島嶼への移住状況と宗教コミュニティの形成と展開を明らかにすることである。すなわち半島の移住地として小榊地区（神ノ島教会・木鉢教会）、山間の移住地として小ヶ倉地区大山町（大山教会）・深堀地区大籠町（善長谷教会）、島嶼の移住地として伊王島地区（馬込教会・大明寺教会）を事例にして、以下の3点の解明をめざす。

第1に、江戸後期の移住地の小榊地区・大山・大籠（善長谷）・伊王島への移住の経緯と状況を可能な限り把握する。

第2に、明治以後の居住展開や信徒世帯の増加に関して、分家創出の状況および長崎市の工業化・都市化に伴う地域状況や信徒の職業状況の変化を把握する。

第3に、小榊地区・大山・大籠（善長谷）および伊王島における宗教コミュニティの形成の過程を明らかにする。とりわけ外国人神父が宗教コミュニティ形成に果たした役割を解明する。

この目的に対応して、第2節で、長崎市および小榊地区・小ヶ倉地区（大山）・深堀地区（善長谷）・伊王島の地域状況にふれ、第3節で、信徒の移住の経緯および居住の展開と信徒世帯の増加を明らかにする。さらに第4節で、大山・善長谷・伊王島（馬込・大明寺）の宗教コミュニティの形成と展開を跡づける。最後に、第5節で長崎市の山間地と島嶼への信徒の移住と居住の展開および宗教コミュニ

ティ形成の社会的特徴を検討する。

のうち図1の半島の小榊地区・山間の小ヶ倉・深堀地区・島嶼の伊王島地区の地域状況を概略する。

2 長崎市および半島・山間地・島嶼の地域状況

長崎市の都市展開

表1の各教会の信徒状況に現れているように、江戸後期以後、長崎市内の半島・山間・島嶼に多くの信徒が移住する。明治以降の長崎市と信徒の移住地

長崎市は水深が深い天然の良港で、江戸時代、日本唯一の貿易港として栄えた。さらに1868年、日本最初の洋式のドックをもつ小菅修船場がグラバー

表1 長崎市内の各教会

	教会設立年	教会名	地区	教会設立の主導	主な信徒層	教会の設立前
1	江戸 1865年	大浦	南部	外国修道会		
2	明治	1880年 大明寺*	南部	外国人司祭	外海	
3		1880年 浦上	北部	外国修道会	浦上	
4		1881年 神ノ島	西部	外国人司祭	8世帯の潜伏キリシタンに、江戸後期の台場工事を契機に福田・三重・出津・黒崎から移住。	1876年、仮教会。
5		1883年 三ツ山	北部		外海から移住。	
6		1890年 馬込	南部	外国人司祭	外海	
7		1891年 高島*	南部		外海（堅山）からの移住と鉾員。	
8		1895年 大山	南部	外国人司祭	外海（黒崎）からの開拓移住。	初代は1880年～1882年に外国人司祭。
9		1895年 善長谷*	南部	信徒	外海（堅山）からの開拓移住。	
10		1897年 中町	東部	邦人司祭が土地購入		民家御堂。
11		1910年 木鉢	西部	網場ノ脇は外国人司祭の資金提供、木鉢教会は長崎教区主導	明治後期に外海（黒崎・堅山・牧野・三重田・赤首・出津）、神ノ島・陰之尾島から開拓移住。	1910年の設立は、網場の脇聖堂。木蜂教会は網場の脇と木蜂間に建設、1936年に神ノ島小教区から独立。
12	大正 1919年	飽の浦	西部	信徒による土地購入・出身地からの寄附	最初は、三菱の船頭・人夫や船員。	1915年、民家御堂。
13	昭和（第一次世界大戦後）	1947年 岳*	西部	信徒。信徒からの資金集めと木蜂教会からの借入金	1895年、稲佐山中腹に外海地区牧野から開拓移住。その後、牧野を中心に外海から開拓移住。	1932年、民家御堂。
14		1949年 稲佐	西部		五島・平戸・西彼杵半島の出身者。	
15		1952年 本原	北部		地区の60世帯すべてが信徒世帯。	クラブを改造して仮聖堂。
16		1954年 本河内	東部	外国修道会		中町教会から分離・独立。
17		1955年 城山	北部	外国修道会		
18		1956年 愛宕	東部	外国修道会		
19		1959年 西町	北部	外国修道会		浦上教会から分離。
20		1962年 東長崎	東部	外国修道会	地域の郊外化に伴う信徒の移住。	
21		1962年 八幡町	東部	幼稚園の付属聖堂		中町教会から分離・独立。
22		1970年 滑石	北部		団地の造成によって信徒が居住。	西町教会から分離。
23	1971年 香焼	南部		三菱重工香焼工場の拡充に伴う陰ノ尾教会の移転。		
24	1972年 深堀	南部	長崎教区に移籍の邦人司祭	三菱重工工業従業者やOB等が多い。	司祭の住宅を御堂とし、死後聖堂に。	
25	1987年 小ヶ倉	南部	外国修道会	住宅地造成によって信徒が居住。		
26		福田*	西部			
27		小瀬戸*	西部			
28		さくらの里聖家族*	西部			

注：外海地区をのぞく教会を示したものである。『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』および『カトリック教報』『新長崎市史』等から作成した。

：教会名の*は巡回教会・集会所を示す。

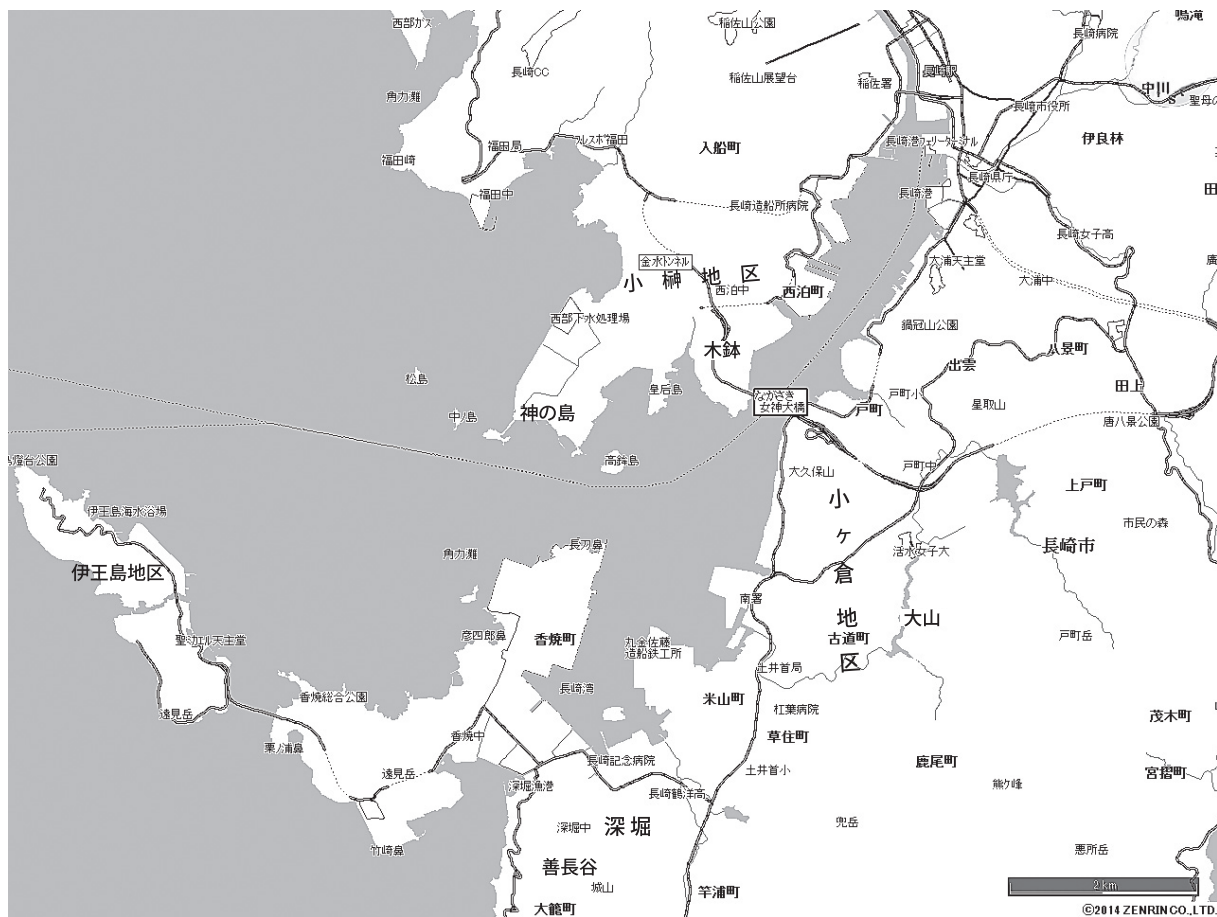


図1 長崎市

らによって完成し、近代工業の端緒が現れる。翌年、この小菅修船場を明治政府が買収し、長崎鎔鉄所（後の長崎製鉄所）の附属施設となり、その後、三菱重工長崎造船所に展開する。明治以降、造船業を主力に重工業が発展する。とりわけ造船業が軍艦の建造（三菱造船所）を担ったため、軍需産業の様相を帯びることになる。

表2の長崎市の人口変化を見れば、1889（明治22）年に市制施行時の5万人強の人口は、周辺人口の流入や周辺の町村との合併で、約10年後（1900年）に約13万人に急増する。第二次世界大戦前、工業化の進展や小ヶ倉村等の周辺村との合併で、人口はさらに増加し約27

表2 長崎市の人口

年	人口(人)	合併状況
1889年	54502	市制施行
1898年	113307	下長崎・戸町・淵・浦上山里（一部）・上長崎村（一部）編入
1900年	129597	
1910年	178074	
1920年	176534	上長崎・浦上山里村編入
1930年	204626	
1938年	268945	小櫛・土井首・小ヶ倉・西浦上村編入
1940年	252630	
1945年	142748	
1950年	241805	福田村（一部）編入
1955年	303724	深堀・福田村・日見村編入
1960年	344153	
1970年	421114	1962年茂木・式見村、1963年東長崎村編入
1973年	439097	三重・時津（一部）編入
1980年	447091	
1990年	444599	
2000年	423167	
2005年	442699	香焼・伊王島・高島・野母崎・外海・三和町、2006年琴海町編入
2010年	443766	

注：『新長崎市史』（第4巻現代編 872 - 3頁）に基づいて作成した。

万人に達する。

1945年、長崎市への原子爆弾投下で浦上地区を中心に7万人以上が死亡し、長崎市内の生産施設も三菱重工長崎兵器製作所大橋工場・三菱重工長崎造船所大橋部品工場・三菱重工長崎造船所幸町工場・三菱電機製作所が全・半壊等の被害を受ける。

しかし、佐世保市や呉市等の海軍工廠が解体・払い下げになる中で、民間企業の三菱重工は民間船舶の建造で隆盛を迎え、第二次世界大戦後、いち早く復興をとげる。さらに高度経済成長期、造船業を中心とする重工業が発展し、深堀村・福田村・日見村等と町村合併促進法に伴う合併によって、人口は1950年に30万人、さらに1970年代に40万人を超える。平成期（2005年）に周辺の半島地区（外海町・香焼町・三和町・野母崎町）と長崎港沖の島嶼（伊王島町・高島町）と合併し、45万人弱に達する。

小櫛地区

小櫛地区は長崎港外の西岸に位置し、稲佐山が南に広がる小半島の先端にあたる。神ノ島は小半島近くの島嶼で、江戸期には佐賀藩領であった。対岸の小瀬戸・木鉢は天領で、神ノ島とともに長崎湾を出入国する船の監視（小瀬戸遠見番所・木鉢浦送船見送番所）や外国船警備（砲台・洋式砲台）が置かれる。

町村制施行時（1889年）、小瀬戸・木鉢・神ノ島は西彼杵郡淵村に編入され、1898（明治31）年に小瀬戸・木鉢・神ノ島で小櫛村が誕生する。1938（昭和13）年、小櫛村の大部分が長崎市に編入され、第二次世界大戦後に福田村大浦郷網場ノ脇が長崎市小瀬戸町に編入される（小櫛3-4頁）。

当時の島嶼の神ノ島だけでなく、小瀬戸・木鉢も山地・丘陵が稲佐山から小半島の白頭山が海にせり出す地形のため「陸の孤島」と呼ばれていた。小櫛

地区が長崎中心部と結ばれるのは、1968年の市道大浜町木鉢町線の開通、1969年の西泊トンネル、1979年の木鉢トンネルの開通によってである（小櫛2-5頁・小櫛小学校創立50周年9頁）。また第二次世界大戦中に神ノ島と小瀬戸間の埋め立てが始められ、1949年に神ノ島は陸続きとなる。さらに2005年の女神大橋の開通で小櫛地区は対岸の戸町と結ばれ、2010年にさらに高速道路（長崎自動車道）と接続する。

小櫛地区には、1884（明治17）年に淵小学校木鉢分校・神ノ島分校の2校が創設される。その後、両校は1955年に併合する。三菱関係者の居住が進み、1960年頃には児童数が900人を超える（小櫛小学校創立50周年5頁）。第二次世界大戦中、木鉢地区に三菱造船木鉢寮が設立され、表3の第二次世界大戦



小櫛地区

表3 長崎市（小櫛・小ヶ倉・深堀・伊王島）の人口変化

	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
小櫛	3162	3123	—	5861	5691	4635	4136	4247	4181	5312
小ヶ倉	2157	2183	—	2693	2575	4994	5534	8397	10681	9654
深堀	3710	3299	3900	5867	5489	4897	10845	9456	8502	7604
伊王島	1792	1543	1572	5388	7266	6348	1683	1233	1035	774
高島	12484	7576	9725	14961	20938	6348	1683	1256	900	539

注：『新長崎市史』（第4巻現代編874-5頁）に基づいて作成した。

前の人口は3000人強に増加する。1953年の給水事業の開始や市営住宅等の建設で、高度経済成長期前、人口は6000人弱に増加する。その後、石油基地・工業団地が設立される（小榎1頁）。一時期、人口は4000人台に減少するものの、女神大橋の開通に伴い丘陵地に大規模団地のポートウエストみなと坂が造成され、近年、人口は増加に転じている。

小ヶ倉地区・深堀地区

小ヶ倉地区・深堀地区は長崎市の中心部から野母崎半島に向う途中にあたり、長崎湾の東岸（長崎外港）に位置する。いずれも旧佐賀藩領で、深堀地区に陣屋が置かれる。1889（明治22）年、旧小ヶ倉村は旧戸町村・旧大浦村・旧浪ノ平村で戸町村を形成し、その後独立して小ヶ倉村となる（小ヶ倉のあゆみ21頁）。旧深堀村は旧大籠村・旧香焼村と深堀村を形成し、その後香焼が香焼村として分離する（新長崎市史91頁）。小ヶ倉村は1938（昭和13）年、深堀村は1955年に長崎市に編入する。

小ヶ倉地区・深堀地区は野母崎半島に延びる山地が海岸に押し出す地形のため、長崎市中心部との交通が制限され、長い間、山間部を経由するか交通船に依存していた。20世紀になり海岸線に県道が開通する。その後、三菱鉱業による小ヶ倉地区・深堀地区の海岸の埋め立てが始まり、大正期には深堀地区で三菱製鋼所が操業を開始する。昭和初期に戸町トンネルが開通し、工場の設立や従業員の宿舎や寮の設立が進み、人口が増加する。

両地区ともに第一次産業人口が多数であったものの、高度経済成長期、長崎市の外港計画による臨海工業地帯が形成され、小ヶ倉地区で石油備蓄基地、

深堀地区で三菱長崎造船所香焼工場が設立される。さらに三菱開発による小ヶ倉山頭地区の開発で大規模住宅団地のダイヤランドが造成される（小ヶ倉のあゆみ22-61頁・新長崎市史第4巻92-3頁）。

小ヶ倉地区大山に関して、1933（昭和8）年に小ヶ倉からの林道が完成し、大山地区の子どもの小ヶ倉小学校への通学は容易になる。それでも4kmの山道の通学の負担は大きく、低学年児童の長期欠席が多く生じたことから、1948年に大山分教場が開校する（閉校記念誌4頁）。

伊王島地区

長崎港外（長崎湾）10kmに伊王島（1.31km²）・沖之島（0.95km²）が位置する。両島は至近距離にあり、1911（明治44）年に架橋される。2011年、さらに両島と対岸（本土）の香焼地区との間に伊王島大橋が開通する（新長崎市史第4巻784・796頁）。

江戸時代、両島は佐賀藩に属し、沖之島・伊王島に遠見番所が設置される。また幕命で佐賀藩と福岡藩により長崎警護の番所（2ヶ所）が設置され、幕末に洋式の砲台（4ヶ所）が建設される。番所関係者以外は無人であったものの、その後、島への居住が始まり、江戸後期約200世帯、幕末期348世帯（伊王島船津185・大明寺96・沖之島67）が居住する。

明治中期には516世帯・2963人に増加する。1889（明治22）年、伊王島と沖之島の両島で伊王島村が誕生する。明治中期に伊王島小学校・沖之島尋常小学校が開校し、両島が架橋した時に学校が統合される。また1941（昭和16）年に電気が通じる（新長崎市史第4巻785-88・793頁）。



深堀地区大籠町善長谷



伊王島地区馬込

表4 大正期の伊王島村の農業状況

地目別	反	自小作別	本業(戸)	副業(戸)	農地面積別	戸
田	1	自作	140	35	1反以下	51
		自作兼小作	40	32	1反以上	141
畑	716	小作	6	10	5反以上	2
					1町以上	2

注：『伊王島郷土誌』（222-3頁）に基づいて作成した。

昭和初期まで、両島の主産業は農業であった。しかし両島は急傾斜地が大半で稲作に適さず、土地のやせた条件不利地のため農産物の収穫量も少なかった。表4は、大正期の伊王島村の農業状況である。地目別ではほぼ畑地、農地面積もほとんどが5反以下の状況である。そのため、両島の主産業の農業は主として「老人婦女子の仕事で、青壮年者や一家の主人は出稼などで家庭に仕送り、生活をささえているような状態」（伊王島郷土誌 221頁）であった。また大正時代の水産業は、専・兼漁家が115戸、兼業が95戸で、兼業の多くは農業等である（伊王島郷土誌 227頁）。

伊王島村の産業状況は、1941（昭和16）年に長崎鉱業（株）による伊王島炭鉱が開坑し、地域状況が大きく展開する。従業員数は、開坑年137人、1945年557人、1950年1449人、1960年1376人と高度経済成長期前まで増加をつづけ、村内に職員社宅（153戸）・鉱員社宅（975戸）・職員寮1棟・鉱員寮1棟等が設立される。その結果、伊王島の人口も、表2のように、940（昭和15）年の人口1572人が1950年5388人、1960年7266人に達する。

しかし、炭鉱（日鉄伊王島鉱業所）は1972年に閉山し、1980年の人口は1683人に急減する（伊王島郷土誌 241-55頁）

3 長崎市（半島・山間地・島嶼）への信徒の移住と居住の展開

江戸後期以降、長崎市内に多くのカトリック信徒が移住する。小櫛地区（神ノ島・木鉢）・小ヶ倉地区大山・深堀地区善長谷・伊王島地区（大明寺・馬込）に信徒が移住した経緯と居住の展開を明らかにしたい。

半島（小櫛）への移住と居住の展開

長崎湾の西岸、稲佐山の南端の小櫛地区は、江戸

後期から明治・大正期に移住した信徒世帯が大半である。このうち神ノ島は陸続きになる1世紀前に信徒が移住する。稲佐山が海に迫る小半島の急傾斜地の木鉢（小瀬戸・木鉢）への移住は、明治後期である。

①神ノ島町

江戸・天明年間（1780年）、現在の神ノ島1丁目あたりに仏教徒の集落が形成される。この時期が神ノ島への最初の移住とされる。信徒（キリシタン）の居住はその後にあたり、神ノ島の西端（現在の神ノ島3丁目）に8世帯が居住する。信徒世帯は漁業を主とし、わずかな農地を耕作して暮らしを立てる（神ノ島小教区史 56頁）。

幕末期、佐賀藩が神ノ島に砲台工事（四郎ヶ島の築造と神ノ島との埋め立て）を計画する。そのため埋め立て予定地に隣接する信徒世帯は、藩命で3丁目内に移転する。補償金を得ていることから、信徒の居住は藩の許可を得たものと推測される。1851（嘉永4）年に始まった佐賀藩の砲台の建造には、延べ人数で人夫21万5892人・石工18万4777名が動員される一大工事で、翌年の完成を目指す。佐賀藩は、藩内の各地、佐賀・諫早をはじめ近隣の島々や福田・三重・出津・黒崎方面から膨大な人夫を集める。こういして集められた人夫・石工の中に信徒（キリシタン）が紛れていたといわれる。（神ノ島小教区史 57頁）。

神ノ島の8世帯の信徒もこの築造工事で働く。その後、神ノ島の信徒と交流をもった出稼ぎの信徒の中から、神ノ島への連鎖的移動が生じる。出稼ぎ信徒は、佐賀藩領の神ノ島ではキリシタンの取り締まりが厳しくないことを知り、また神ノ島と住民と接点を得たことで、神ノ島の知人・縁者を頼ったり、島民との婚姻を通して移住が進んだとされる（神ノ島小教区史 57頁）。

神ノ島の洗礼者数は、1883（明治6）年15人、

1884（明治7）年25人、1885（明治8）年14人、1886（明治9）年18人の合計72人である（神ノ島小教区史66頁）。江戸末期からの居住世帯は、1世帯平均6人とすれば、12世帯程度と推定される。加えて島外からの移住の信徒は30人程度で、明治後の移住世帯は5世帯程度と推計される。

大正期（1920年）に信徒数は1000人近くまで増加し、第二次世界大戦後（1948年）に1380人に達する。

表5で神ノ島の信徒世帯（1995年）の居住状況を見ると、3丁目は大半、2丁目は半数の世帯を占める。平成期まで、3丁目は全世帯が信徒であったという（神ノ島小教区史57頁）。さらに信徒の少な

表5 神ノ島の信徒の居住地

世帯数		神ノ島町		
		1丁目	2丁目	3丁目
信徒	1995年	48	75	51
町別人口	2001年	298	133	60
	2010年	279	127	52
	2016年	266	133	56
信徒比率		16.1	56.4	85.0

注：神ノ島教会の信徒世帯数は『神ノ島小教区史』（132-166頁）から集計したものである。町丁別世帯数は住民基本台帳に基づく丁別人口・世帯数である。
：信徒比率は信徒世帯数を2001年の世帯数で割ったものである。

表6 世帯数の多い姓と神ノ島3丁目居住世帯

姓	世帯数	1丁目	2丁目	3丁目	備考
宮崎	19	4	6	9	1871（明治4）年、捕縛される。
中ノ瀬	15	7	2	6	1906（明治30）年以前に役職就任。
岩崎	13	3	3	7	3代目教え方（明治・大正期か？）。
鶴巻	12	3	2	7	第二次世界大戦後に役職就任。
一ノ瀬	10	4	2	4	1871（明治4）年、3人が捕縛される。
鳥辺	9	2	6	1	4代目教え方（明治・大正期か？）。
宮地	7	1	1	5	第二次世界大戦前に役職就任。
山脇	4	1	2	1	
池本	3	0	3	0	第二次世界大戦前に役職就任。
尾崎	3	1	2	0	
中島	3	0	0	3	1871（明治4）年、捕縛される。
西	3	0	3	0	1871（明治4）年、2人が捕縛される。
古川	3	0	3	0	
藤井	3	1	2	0	
峰脇	2	0	0	2	
吉村	2		2		1871（明治4）年、捕縛される。
紙崎	1	0	0	1	
沢野	1	0	0	1	
平	1	0	0	1	第二次世界大戦後に役職就任。
竹内	1	0	0	1	
橋口	1	0	0	1	
森	1	0	0	1	大山の森増市（1920年生）家か？
山崎	1	0	0	1	
同姓2世帯	12	1	11	0	
同姓なし	44	19	25	0	
合計	174	47	75	52	

注：『神ノ島小教区史』の信徒名簿・家族写真および役職名簿、65-66頁の記載に基づき作成した。
：備考の一部は、『小ヶ倉のあゆみ』の同窓会名簿の記載に基づく。

った本村の1丁目にも一定数の信徒が居住する。交通の便や埋め立てによる土地造成等の結果と見られる。

丁別の居住状況に関して、表6で姓別の居住状況を見れば、3丁目に明治初期の居住が確認される宮崎家9世帯・中ノ瀬家8世帯・一ノ瀬家4世帯・中島家3世帯の4家24世帯、さらに明治期の居住が確認される岩崎家7世帯・鳥辺家1世帯の2家8世帯も居住することから、初期の移住世帯は3丁目に居住し、まず周辺に分家等の世帯を創出したと見られる。その一方、第2次世界大戦前の役職経験者の一族の居住も多く、明治中期以降も3丁目に移住が継続したことが分かる。さらに昭和期の移住者（大正期生まれの他地区出身者）の居住も見られ、昭和期にも移住が継続する。

2丁目には、明治初期の居住が確認される西家3世帯・吉村家2世帯の2家5世帯が居住し、2丁目も初期の居住地であると判明する。さらに海岸の埋め立て等があり、明治初期の居住世帯の分家と明治中期以降の移住世帯の居住が展開したと推測される。また同姓2世帯の家の大半、同姓なしの家の半数以上の世帯の居住から、昭和期の移住が多いと推測される。

さらに1丁目のうち2丁目との隣接地や山間部、小瀬戸との間の埋め立て地に信徒の居住が進む。この地に居住する信徒は、明治初期以降の世帯の分家およびその後の移住世帯と推測される。

②木鉢（小瀬戸町・木鉢町）

小柵地区木鉢への信徒の移住は、『木鉢教会創設50周年記念誌』によれば、明治後期（1901年）である。草分けは、外海地区黒崎の木本庄作である。神ノ島の対岸に位置する小瀬戸赤瀬に移住後、約500m北西の網場ノ脇に移動する。当時、人里離れた海岸で、わずかに非信徒2世帯が居住している地であった。木本庄作の居住後、黒崎から弟の木本松次郎・木本鉄蔵、一ノ瀬孝太郎、外海地区堅山から下平嘉十と息子の下平嘉蔵、神ノ島から岩崎松蔵氏と息子の岩崎吉三、陰ノ尾島から岩崎喜右エ門、岩崎留蔵、犬塚儀八の各世帯が移住する（21頁）。

『カトリック教報』43号（1930年8月）によれば、網場脇の草分けは、1890年代後半、陰ノ尾島から移住した岩崎吉三の世帯で、先住世帯は仏教徒の4世帯であった。その後、外海地区（黒崎・堅山）から

の移住が日を追って増加して、1907（明治40）年頃には15世帯が居住する。

一方、木鉢への信徒の移住は、網場ノ脇への移住の5年後（1906年）である。外海地区牧野の鶴田与三右エ門・鶴田小八の各世帯が草分けである。その後、黒崎の米田儀十と息子の米田儀三郎、外海地区三重田の橋十兵衛、道斧吉、外海地区出津の尾下市作の各世帯が移住する。

矢草は木鉢の山側で上矢草は杉や雑木の生い茂る林で人の居住が信じられなかった場所という。この下・上矢草に、網場ノ脇からの移住世帯（牧野の水口浅吉・大山仙次郎の各世帯）、大正期に牧野の水口弥平、外海地区赤首の久松安右エ門、久松捨五郎、久松吾右衛門、黒崎の黒崎伊十、水口留吉、山本紋次郎、五島の下田権太郎、岩永卯平の各世帯が移住する。矢草のさら上方の台場（砲台）は山頂付近にあたる。牧野の川口富士右エ門の世帯が明治後期（1906年）に移住する。

木鉢浦の西岸（木鉢浦）には、明治後期、牧野の山口久平、尾上右太郎、三重田の佐々儀右エ門、久田作蔵 大正期に出津の今村市十、村岡久次郎の世帯が移住する。また明治後期、ひわ山に坂下庄兵衛、水口岩吉の世帯が移住する。

木鉢浦東岸の一本松に、明治後期、赤首の久松五郎八と弟の久松作蔵、大正期に平戸島の末吉見喜大夫、五島の岩崎仁造の世帯が移住する（木鉢教会創設50周年記念誌21-2頁）。

表7は明治後期から大正期の信徒の移住を集計したものである。この時期の移住世帯43世帯のうち35世帯が外海地区の出身で、8割以上を占める。草分けの黒崎出身の世帯の移住地は網場ノ脇で、外海地区（堅山）と近隣の神ノ島・陰ノ尾島からも移住が生じる。しかし網場ノ脇の移住地は農地等の制約・狭小性のためか矢草に移る世帯が出現し、10世帯程度の規模にとどまる。その後の信徒の来住地は木鉢の各地区に移行する。

外海地区牧野の世帯が木鉢（本郷）の草分けで、牧野・黒崎・三重田・出津の世帯の移住が生じる。赤首・大野は外海地区の中では後発で、その移住地は山間地である。1910年頃（明治40年代）の信徒世帯数は、網場ノ脇10世帯、木鉢8世帯であったが（木鉢教会創設50周年記念誌21頁）、明治末には木鉢19世帯と網場ノ脇の倍の世帯になる。

大正以降、五島・平戸・黒島の出身者の移住が増加する。表8は、木鉢教会の宿老（第二次世界大戦前）や戦後（1970年代）の木鉢小教区の地区長の姓である。新来の地区長の姓は、大正期以前に該当地区に居住した一族以外の新たな居住地を探る手掛かりとなる^①。

すなわち、第1に、大正期までに移住した家と同姓の世帯が他地区に生じたことで、分家の発生が推測されることである。おそらく移住した地区での分家の創出後に他地区での創出が生じたと推測される。第2に、昭和期以降の移住世帯は網場ノ脇を含めて、木鉢の各地区に相当数の世帯が居住したことである。この時期には農業移住はなく飽の浦地区の三菱重工業長崎造船所等での就業に伴う移住に代わったと推測される。なお来住世帯の姓は五島・平戸・黒島の信徒の姓が多く見られるだけでなく、神ノ島の信徒の姓（宮崎・鶴巻・鳥辺・山脇・中島・峰・西等）の世帯もかなり存在する。第3に、木鉢南東部・南部の海岸の埋め立てによって住宅地・団地が形成されたことである（小柵11頁）。信徒の来住や木鉢の世帯の分家の創出が多くなり、教会の地区区分に小瀬戸・新丁場・住宅が加わる。この住宅地・団地小瀬戸地区に神ノ島教会に所属の信徒世帯も存在し、木鉢の各地区等に神ノ島の信徒の居住地が広がる状況が明らかである。

さらに女神大橋の開通後、下矢草・上矢草に三菱地所の開発による巨大団地（ポートウエストみなと坂）の建設され、両地区の信徒は主として木鉢（本郷）、小瀬戸・新丁場に転居する。

表7 木部地への移住者の出身地

地区	時期	合計	外海								移住世帯の姓と世帯数			
			牧野	黒崎	赤首	三重田	出津	堅山	大野	神ノ島		陰ノ尾島	五島	平戸
網場ノ脇	明治後期	10		4					2		2			黒崎：木本3（兄弟）・一ノ瀬、堅山：下平2（親子）、神ノ島：岩崎2（親子）、陰ノ尾島：岩崎2
	明治末	1									1			陰ノ尾島：犬塚1
木鉢	明治後期	9	4	2		2		1						牧野：鶴田2・水口・大山、黒崎：米田2（親子）、三重田：橋・奈、出津：尾下
	明治後期	1	1											牧野：川口
台場	明治後期	4	2			2								牧野：尾上・山口、三重田：佐々・久田
木鉢浦	明治後期	2						2						出津：今村・村岡
	大正期	2	1	1										牧野：水口、黒崎：坂下
ひわ山	明治後期	3									1			赤首：久松2（兄弟）、大野：山本
	明治末	2										1		平戸：末吉、五島：岩崎
一本松	大正期	4	2	1										牧野：水口・岩永、黒崎：黒崎、五島：下田
	大正期	5	2	2	3									赤首：久松3、黒崎：水口・山本
合計		43	10	10	5	4	3	2	2	1	2	2	1	

注：『木鉢教会創設50周年記念誌』の21-22頁の記載から作表したものである。

表8 木鉢教会の宿老・地区長名

地区	下位区分	時期	世帯数	明治・大正の移住世帯と地区長経験者の姓
網場ノ脇	網場ノ脇	明治期	11	木本3・一ノ瀬・下平2・岩崎4・犬塚1
	その後に居住の地区長の姓			野下・木口・永川・宮崎
本郷	木鉢	明治期	9	鶴田2・米田2・水口2・大山・橋・道・尾下・黒崎・坂下
	その後に居住の地区長の姓			村山・山下・東海・橋口・岩崎・貫間・森
木鉢浦	木鉢浦 (+びわ山)	明治期	6	尾上・山口・佐々・久田
		大正期	2	今村・村岡
	その後に居住の地区長の姓			馬込・嶋本・岩崎・山田・山下・吉川・久松
一本松	一本松	明治期	3	久松2・山本
		大正期	2	末吉・岩崎
	その後に居住の地区長の姓			山脇・吉田・清水・深堀・谷口・村川・中島・森・岳野・山口・熊谷
下矢草	下矢草	大正期	4	水口・岩永・黒崎・下田
	その後に居住の地区長の姓			加賀江・山下・坂下・下平・浦・江浦・米田・中尾・堤・夫津木・川口・中村・桑村
上矢草	上矢草	大正期	5	久松3・水口・山本
	台場	明治後期	1	川口
	その後に居住の地区長の姓			明松・横川・米田・畑原・村岡・中里・犬塚・白浜・永浦・浜口・荒木
小瀬戸	地区長の姓		桧垣・下平・広岡・今村・鶴巻・平・吉田・向井・小林・中島・片山・宮崎・末吉・副島・中里・宮地・高谷	
新丁場	地区長の姓		橋口・鳥辺・西田・高巢・宮崎・本田・岩永・大川・平石・白浜・山下	
住宅	地区長の姓		長田・西	
地区長以外の教会役職者の姓				田口・山田・横川・平田・笹崎・丸尾・戸村・竹山・松尾・(久保)

注：『木鉢教会創設50周年記念誌』の21-2頁・33頁・74-7頁の記載から作表したものである。
：太字の姓は、明治・大正期の移住世帯にない姓である。

山間地（小ヶ倉地区大山町・深堀地区大籠町善長谷）への移住と居住の展開

小ヶ倉地区・深堀地区は長崎市南部に位置し、南に延びる野母崎半島の付け根にあたる。旧佐賀藩領で、小ヶ倉地区大山・深堀地区香焼（旧陰ノ尾島）・善長谷に信徒の集住地が存在する。現在、旧陰ノ尾島は三菱重工業香焼造船所の敷地である。

①大山町

大山への信徒（キリシタン）の移住は江戸末期（1840年代）で、水方の市兵衛を指導者とする外海地区の黒崎村永田の10世帯であった。すでに周辺の伊王島（大明寺・馬込）・香焼・善長谷に移住があり、大山移住は後発である。伊王島（馬込）や善長谷の先人を頼ったものの、土地の狭小性とキリシタン集住の危険性のために移住を断られる（大山小教区史150年の歩み16頁）。

『小ヶ倉のあゆみ』に黒崎出身の七平、庄右衛門、要助、要右衛門、庄左衛門等の移住者の名前とその後の状況が記されている。大山村の長老、松川政八（4代目で1893年生まれ）の話では、開拓移住地を求めてさらに土井首村に行き、八郎岳の中腹への移住を懇願するものの許可されなかった。それで小ヶ倉村に行き、村持ちの熊ヶ峰の中腹（現在の大山）への移住を再三にわたって懇願したという。小ヶ倉村有志等が協議して、キリシタンの疑いをいだきつつも、本村からは4kmほど離れた山中でもあり、移住が認められたという。「当初の頃は移住者の全家族が一棟の萱葺きの長屋に起床を共にしながら原野、山林を切り開いて生活した」と語っていることから、家族を呼び寄せる前に成人男性の先行移住の状況が明らかになる（93-4頁）。

大山教会主任司祭三村誠一神父への聞き取りで

は、黒崎の信徒は大山を下見して、地主に土地の取得交渉をしたという⁽²⁾。当初、熊ヶ岳のかなり山側を希望したが、地主から現在の場所を勧められる。実際、土地が良く水もあり、稲作に適した地であった。こうした経緯もあって、現在に至るまで小ヶ倉地区（本村）との関係は良好という。

1868（明治元）年から1873（明治6）年のキリシタン迫害まで、大山は12世帯あり、「白2戸、黒10戸」であった。黒はキリシタンを意味する侮蔑の別称で、信徒世帯は10世帯である（大山小教区史150

年の歩み16頁・小ヶ倉のあゆみ95-6頁）。そのため江戸期の信徒世帯数は、明治初期まで増減しなかったことが分かる。明治・大正期の信徒世帯数は不明である。三村神父への聞き取りでは、この時期、貧しさから抜け出すために懸命に働いて土地を買い増し、大山町は信徒世帯の持ち山になったという。

表9で第二次世界大戦後の昭和期の世帯数を見れば、1945年に41世帯に増加し、2010年には95世帯に達する。明治初期の8倍強に増加する。しかし人口は200人台で推移（減少傾向）しているため、

表9 表小ヶ倉地区大山の世帯数

	年等	世帯数	人口	世帯平均人数
信徒世帯	1994年	73	308	4.2
	信徒地区別	上25・中20 下23・萩尾橋5	上93・中80 下117・萩尾橋18	上3.7・中3.4 下5.1・萩尾橋3.6
住民世帯	1945年	41	248	6.0
	2001年	90	276	3.1
	2010年	95	236	2.5
	2016年	89	208	2.3
信徒比率		81.1	111.6	—

注：大山教会の信徒世帯数は『大山小教区150年の歩み』（46-60頁）から集計したものである。1945年の世帯数・人口は『小ヶ倉のあゆみ』（34頁）、2001年からは住民基本台帳に基づくものである。信徒比率は信徒世帯数を2001年の世帯数・人口で割ったものである。

表10 大山の信徒と居住地区

信徒の姓	世帯数 合計	地区区分				小ヶ倉小学校大山分校入学者							
		上	中	下	萩尾橋	1948年 -50年	1951年 -60年	1961年 -70年	1971年 -80年	1981年 -90年	1991年 -2000年	2001年 -04年	入学者 合計
大山	32	18	6	7	1	11	44	48	42	17	15	4	181
中尾	11		8	1	2	3	9	7	8	5	2		34
森	6		3	3		1	8	9	6	5	5	2	36
加藤	4			4				7	11	2	4	3	27
犬塚	3	1		2				6	4	2	2		14
松川	3	3					7	7	2	2			18
渡部	2			2				1	4	1	1	1	8
赤波江	1			1							3		3
岩崎	1	1											
瀬川	1			1		2	3	1		4			10
瀬戸	1		1						3	1			4
立山	1			1									
田中	1		1				5	1		1			7
長濱	1				1								
中山	1				1								
橋口	1	1					4	1					5
松本	1			1									
山口	1	1											
山下	1		1						1	3			4
合計	73	25	20	23	5	近藤1 太田1	近藤1 山本2		木村1	西田1	西田1	明松2	361
						19	83	88	82	44	33	12	

注：大山教会の信徒世帯数は『大山小教区150年の歩み』（46-60頁）および『小ヶ倉のあゆみ』（118-203頁）から抽出・集計したものである。

各世帯の規模縮小を伴う世帯増加といえる。三村神父への聞き取りでは、他出者はあるものの、挙家離村の世帯は少なく信徒数は減少しないという。その一方で、大山のかなり上側で三代目の教会のあった場所の世帯（10世帯程）の中に、下の町に近い場所に移動する傾向があり、大山の内部で移動が生じているという。

表10の信徒世帯の姓と大山の地区区分を見れば、大山家・松川家が上に、中尾家・森家が中に移住したと推測される。地区内で分家等を増やし、さらに大山家・松川家は中・下・(萩尾橋)、中尾家・森家は下・(萩尾橋)で分家等の創出や移動が生じたと推測される。こうした分家等の創出は、第二次世界大戦前に各家族が土地の買い増したこと、高度経済成長期後の大山や小ヶ倉地区の道路交通の整備、小ヶ倉地区・深堀地区の工業化・都市化が背景にあると見られる。

一方、同姓世帯数の少ない家の多くは下地区・萩尾橋地区に居住することから、新来の勤労世帯が多いと推測できる。表10の右側は1948年に開校し2006年に閉校した小ヶ倉小学校大山分教場（分校）の入学者の姓・人数である。上地区・中地区の居住世帯の一族は開校時から入学者がいるのに対して、上地区・中地区に同姓世帯のない下地区の世帯およ

び中地区の一部世帯は1961年以降の入学で、高度経済成長期後の来住が裏づけられる。なお、三村神父によれば、大山町は市街地調整区域のため、来住世帯は大山の世帯に関係があるという。そのため下地区等の居住世帯には、婚出の娘世帯等の居住等が含まれると推測できる。

次に、大山の信徒の居住の展開と他出の状況を見ていきたい。表11は小ヶ倉小学校の卒業生のうち大山町の出身が判明した卒業生の居住状況である。なお名簿作成時に19歳以上の卒業生を集計している。この表から、第1に、学校卒業後も男性の7割弱、女性の5割強が大山に居住する状況が判明する。一時他出後の還流も含まれるが、とりわけ男性の高い比率は、明治以降の大山における分家の創出に係る。女性の半数が大山に居住する状況も同様で、大山にとどまる男性の増加で、地区内の婚姻が一般的になった状況を裏づけている。

さらに大山以外の居住地も長崎市内26.4%、長崎県内2.3%、長崎県外11.6%と長崎市内が4分の1を占め、大山を含めて大多数が長崎市内に居住する状況が判明する。市内のうち大山周辺の小ヶ倉地区・深堀地区等の居住が1割弱であることから、大山から周辺への居住の拡大傾向と女性の婚姻後の居住傾向が明らかである。女性の通婚に関して、長崎市

表11 大山の信徒の他出先

1978年の居住地	長崎市内											
	大山	小ヶ倉・深堀・大浦	伊王島	浦上	大籠町(深堀)	三和町布巻	神ノ島	外海	木場	水の浦	本河内	市内(その他)
男性	68	5	1	1	—	2	1	—	1	2	1	3
	68.0	5.0	1.0	1.0	—	2.0	1.0	—	1.0	2.0	1.0	3.0
女性	61	13	5	3	3	—	—	1	—	1	1	13
	52.6	11.2	4.3	2.6	2.6	—	—	0.9	—	0.9	0.9	11.2
合計	129	18	6	4	3	2	1	1	1	3	2	16
	59.7	8.3	2.8	1.9	1.4	0.9	0.5	0.5	0.5	1.4	0.9	7.4
他出地	長崎市内	長崎県内	九州	九州以外	修道院		不明	合計				
					外国	国内						
男性	0	2	1	12	—	—	30	130				
	0.0	2.0	1.0	12.0	—	—	—	—				
女性	1	2	1	6	1	4	31	147				
	0.9	1.7	0.9	5.2	0.9	3.4	—	—				
合計	1	4	2	18	1	4	61	277				
	0.5	1.9	0.9	8.3	0.5	1.9	—	—				

注：『小ヶ倉のあゆみ』の小ヶ倉小学校の卒業生のうち卒業年が1902年-1951年までは大山地区と判明できる卒業生、卒業年が1953年からは大山分校に入学した小ヶ倉小学校の卒業生（当時19歳以上）を集計したものである。
：各項目の数値の上段は実数、下段は不明を除く百分率を示している。

内のカトリック信徒の集住地（伊王島・浦上・大籠・外海）の居住が1割弱、さらに長崎県内の居住地も信徒の集住地の太宰市（竹松・植松）・新上五島町で、カトリック信徒の通婚における類縁（宗教）関係の発動の状況がうかがえる。

②大籠町善長谷

善長谷への信徒（キリシタン）の移住は、江戸後期（1800年代初め）とされる。外海地区堅山の佐八を中心とする6世帯が、旅芸人を装いながら野母崎半島南端の脇崎町木場や半島中部の蚊焼町くじら浜を経て、善長谷に居住したという（郷土史深堀 208-209頁）。居住の条件は八幡神社の祭礼の水方を務めることである。聞き取りでは、深堀地区の菩提寺の檀家でもあったという。明治期、カトリックへの回宗を巡って集落で話し合いがもたれ、神道を守る世帯が蚊焼町岳路に移り、「離れ切支丹」として八幡社の祭礼を続けたという（郷土史深堀 208-9頁）。

一方、『カトリック教報』179号（1936年）に「善長谷切支丹物語」として古老の話が紹介されている。この記事を整理・要約すれば、次の通りである。

1823（文政6）年、外海地区三重の東堅山の水方で独身の佐八、八助、仙右衛門、惣五郎、甚吉、門五郎等が庄屋や村人の嫌がらせにあう。この7家族と2独身者が東堅山を支配する深堀藩の陣屋が置かれた深堀に直訴に行く。東堅山を撤去する状況は「さッやかな家財道具を取纏め、闇に紛れて深堀へ渡り、表面では芝居騒動（芝居について何か問題が起ったこと）にて立ち退くかの如く装い」とあり、逃散を思わせる素早い動きである。

佐八らは、東堅山を所領する深堀猪之助に開墾移住を願い出る。深堀猪之助はこの願いを同僚に相談し、深堀領主に言上する。藩主から大村藩領の野母・樺島・川原を除く「余が領内、希望の原野へ移住させよ」という開拓移住の許可が得られる。

それで、野母崎半島東側の脇崎村や木場に向う。しかし希望に合わず野母崎半島の西岸の蚊焼村の由利崎へ行き、移住を申し込む。当時、蚊焼と三重（堅山）の両村の農民は、田の埋草の問題で対立していたため、承諾を得るところか立ち退きを迫られる。最後に現在地へ辿り着いたのだという。なお『善長谷教会献堂60周年』では6家族とされ、旅芸人の装いは脇崎等を移動中とされる（1頁）。

こうした事情から、大籠町善長谷の原野（開拓地）

数町歩は深堀藩主の従事役（家老）や深堀猪之助らの斡旋で、東堅山の信徒に与えられたと判断できる。さらに、記事に八助の子の近右衛門が深堀家の家老に中元奉公、甚吉の子の辰右衛門が深堀権兵衛の下男奉公、信徒が神社の接待役等の役割を担っていたとされることから、地代の代わりに賦役労働が課せられていた状況が判明する。

古老は、佐八らが若葛を採集して萱葺きの掘立小屋を造り、長浜村の古家を買取って水方の家とし、「切芋のかゆをすッりて」開拓していったのが現在の善長谷集落である、とつづける。なお記事には、菩提寺の過去帳には善長谷の地名が「禅定」と記され、「禅定谷と書くのかも知れぬ」とある。開墾移住当時、人別改め、宗門調等があり、八幡神社の旗挙を命ぜられているものの、踏み絵はなかったという。

かなり後、外海地区出津で「茂重騒動」が出来る。茂重が善長谷に逃げ込んだ可能性があると長崎奉行所から注進があり、深堀藩は40余名の役人を善長谷に向かわせる。この騒動の中で、善長谷の6世帯が蚊焼村の長瀬や岳路、陰ノ尾等に移住したという。この経緯に関して、『善長谷教会献堂60周年』には「何人かであらしの夜に善長谷を密かに出て、岳路に逃げてそのままその地に（隠したマリア像を＝筆者）埋めて隠し潜伏しつづけました。その後、明治に入ってから禁教令が解かれても、善長谷に戻ることはなくその地に居住していました」（15頁）とある。

善長谷の信徒への聞き取りによれば、草分けの世帯は長谷川家で、明治以降、五島・大山から信徒世帯が移住し、世帯が増加する。その後、山口家・熊谷家・谷川家の系譜の世帯が多くなる。

信徒世帯は、農業と漁業に長く従事する。表12

表12 深堀地区大籠

	世帯数	農家数	非農家数
1970年	38	38	—
1980年	60	28	32
1990年	77	29	48
2000年	78	21	57
2010年	70	3	48

注：『2010年世界農林業センサス農業集落カード』のデータで作成した。
：2010年の農家数は販売農家数である。そのため農家数は22世帯と推定できる。

は善長谷を含む大籠の農家数である。1970年まで全世帯が農業に従事していたことが判明する。農業に関して、牛を数頭飼育する農家もあった。第二次世界大戦後も畑の開墾や養鶏がつづけられる。その後、漁業に加えて造船所の通勤船を運航する仕事につく信徒もいた。女性グループは、海岸に接岸する鰯漁船に委託され、鰯を善長谷に持ち帰り煮干し加工し、業者に引き渡す仕事をしていたという。

昭和初期に32, 3世帯、世帯が最多の第二次世界大戦前には60世帯250～300人であった。また第二次世界大戦中に善長谷に建設され兵舎に、戦後、4世帯が居住し、旧兵舎の老朽化で深堀に転居したという（善長谷教会献堂60周年17・22-3頁）。

『善長谷教会献堂60周年』から上五島の出身の移住世帯が判明するが、いずれも善長谷の世帯と親族関係が存在する。1952年に約50世帯が居住していることから、第二次世界大戦後に世帯数の減少が始まったといえよう。表12の大籠の世帯数は2000年まで増加しているため善長谷の下への移動が生じていると推測される。聞き取りでも、若い世代が下方や平地の深堀周辺に居住する傾向にあるという。現在の善長谷の世帯数は15, 6世帯である。

島嶼（伊王島町馬込・大明寺）への移住と居住の展開

伊王島・沖ノ島（伊王島町）・高島（高島町）は、旧佐賀藩の長崎港沖の島嶼である。表3のように、鉾山の開坑で高島・伊王島ともに人口が増加し、7000人台・2万人台に達する。しかしその後、炭鉱の閉山に伴い人口流出が生じ、とりわけ高島は2010年に500人台に激減する。

一般に、江戸時代の沖之島・伊王島の遠見番所への佐賀藩の派兵や追従者の中に信徒（キリシタン）がいたと見られる（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ30頁）。しかし1968（明治初）年の公的な記録（大隈文書）に「近傍ノ小島ニ移住シ、即チ、大明寺村、大島（沖島の誤りか）、高島等、今日邪徒アル所ハ大体皆、三重ノ末孫ナリ」（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ33頁）とあり、信徒の出身地と居住地と遠見番所の藩士や移住の仏教徒の居住地（両島の中心の船津・船津瀬戸の江向）の相違が判明する。そのため信徒の移住と佐賀藩の派兵が重なり合うとはいいがたい。

①馬込

馬込への信徒の移住は、外海地区の出身世帯である。沖之島の中央の渡の浜（仲町）に上陸し、渡の浜と江向の南のドベの浜（大渡・塩町）に居住する。しかし後発移住の信徒世帯は漁業権を得られず、浜の利用や磯物も取ることもできなかったという。信徒が居住する渡・大渡・椎山・土井・向イは馬込と呼ばれ、船津瀬戸江迎と区別される。馬込は番所や深堀の役人が乗馬用の馬をつないだ場所に由来する地名という（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ35頁）。しかし馬込は馬の牧場跡地で、その地に開拓移住した可能性がうかがえる。1952年に93歳で亡くなった馬込の通称椎山キヤ（戸籍名村上キヤ）は外海地区永田の出身で、キヤの甥が「先祖此ノ地ニ移住開拓ヲ創シ以来現ニ五代」と記す。1854年の沖之島の全世帯数は65世帯程度で、1871（明治4）年の馬込の信徒は20世帯である（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ34-5頁）。

②大明寺

伊王島への移住の信徒も外海地区の出身世帯である。大明寺の小池ミヨ（1866年～1928年）によれば、小池家と山口家の伝承では先祖は出津という。伊王島北側の海岸（大明寺浜・仙崎・船津寄りの入り江のドンゴ瀬の浜）に上陸し、番所関係の居住のあった船津以外の大明寺浜・横山・仙崎・姥瀬・唐船守あたりに居住する。また船津の西の山側の一本松は、江戸時代に12, 3世帯あり、仙崎・姥瀬の居住世帯の子孫や馬込からの移住世帯という（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ34-5頁）。おそらく一本松は新たな開拓地で、両島の分家世帯や新たな来島世帯の居住地と推測される。

4 長崎市（半島・山間地・島嶼）における宗教コミュニティの形成と展開

江戸後期以降に移住した信徒世帯は、明治期の禁教令の高札の取り下げ後、定住地で宗教コミュニティの形成をめざす。とりわけ長崎港外の伊王島・小櫛地区では信徒が急増し、長崎教区も主要地区に位置づける。

こうした島嶼・半島地区で外国人神父の主導によりいち早く教会が設立される。その一方、島嶼・半

島・山間地で信徒による民家御堂や仮教会が設立され、宗教コミュニティの端緒が現れる。

半島（小櫛）における宗教コミュニティの形成と展開

長崎湾の西岸、稲佐山が海に迫る小櫛地区では、江戸末期以降に一定数の信徒が集住する神ノ島に教会がいち早く設立される。さらに明治中期以降に信徒が来住する小瀬戸・木鉢に新たな教会が設立される。

①神ノ島教会

神ノ島では、江戸末期、西忠吉・政吉兄弟が長崎港沖の諸島や外海地区（出津・黒崎）、平戸島（紐差・獅子）、佐賀県馬渡島に伝道に赴き、各地の信徒を長崎の外国人宣教師に案内する。しかし明治期、伊万里県（佐賀県から改称）に捕えられ佐賀市外の旧評定所牢獄に移送（異宗徒移送）される（神ノ島小教区史 60-64 頁）。

キリシタン禁制の高札の撤去後、1873（明治 6）年から 4 年の間に 62 人がパリ外国宣教会の神父によって改めて洗礼を受ける。新たに神ノ島に移住した信徒を含めて信徒は 100 名を超える規模になる。

こうした中で 1876（明治 9）年にブレル神父が神ノ島に仮教会を設立する。仮教会の設立が未洗のキリシタンの受洗機会になり。1978（明治 11）年に 40 人、翌年に 90 人がティッシュ神父によって洗礼を受け、神ノ島の信徒数が増加する。さらに伊王島や高島等の長崎港沖の信徒を収容しきれなくなり、日曜日や大祝日は、各地の大きな民家を御堂として、交代でミサ聖祭を行う。

草分けの信徒世帯は、自分たちが居住する 3 丁目に教会建設を提案するものの、1880（明治 13）年に着任したエミール・ラゲ神父と長老の話し合いによって、現在の神ノ島教会が立地する神ノ島の中央部（2 丁目）の土地を確保し、教会を建てることにする（神ノ島小教区史 66 頁）。

ラゲ神父の建立した神ノ島教会の資料は皆無という（神ノ島小教区史 67 頁）。1881 年の南緯代牧区の報告には、「彼らは貧しいにもかかわらず、今教会と学校を建てている。最も小さな部落に至るまで、自分たちのために『祈りの家』を望み、そのために大きな犠牲を払っている」（パリ外国宣教会年次報告 1-71 頁）とあり、教会設立に信徒の関与が

大きかったと推測される。また報告書に学校とあるのは小櫛小学校神ノ島分校である。神ノ島教会の経営で堂ノ下（3 丁目）の松尾甚太郎（教え方）と山下幸之進（仏教徒）の両氏等が教師となり、1913（大正 2）年に神ノ島尋常小学校が創設されるまで継続される（神ノ島小教区史 67 頁）。

明治後期、神ノ島教会はシロアリ被害がひどく大修理が必要になる。1892（明治 25）年に赴任したデュラン神父はフランスの生家からの送金で、木造部分を煉瓦と漆喰に替える大改築を行なう。しかし資金が不足したため、神ノ島の 53 世帯は 1 世帯最高 100 円、一般 70 円を拠出している。なお当時解体した木材は再利用が可能であったため、小櫛小学校と神ノ島分校の校舎の改築に利用する。

しかし、シロアリの被害はその後もつづき、1920（大正 9）年にも修理を行なう。この時期の信徒数は 1000 人近くまで増加し、工事費の負担は 1 世帯 40 円であった。昭和期にも 3 回の改修が行われる。第 2 次世界大戦後、信徒数は 1380 人に達する。3 回目の改修を行ない、1961 年に完成する。この時、現在の司祭館を新築する。さらに 1974 年、老朽化が激しくなったため、4 回目の修理が行なわれる。工事費は 151 万 4326 円で、1 世帯当たり 1 万円であった。1980 年に大雨で教会横のがけが大きく崩れ落ちる。5 回目の教会修理費 1344 万円、賄棟、司祭館増改築費 1112 万円、追加工事 140 万円で、合計 2598 万 7100 円であった（神ノ島小教区史 67-9 頁）。

1928（昭和 3）年、主任司祭の平田善次神父は女部屋を設立し、教会の奉仕と公教要理を担当していた女性 4 名を入会させる。神ノ島教会のわずかばかりの援助と院長持参の畑地の耕作で共同生活を始める。同年に入会者 2 名があり、洋和裁の教育を受けさせる。その後、入会者は専門教育を受けることになる。山口福太郎神父の時に託児所（愛児園）を開設し、保育の教育を受けた 2 人の会員が担当する。宮崎に移住した神ノ島 3 丁目の松尾甚太郎氏の畑地（1 段 5 畝）を安価（600 円）で譲りうけて施設の用地とする。さらに 1947 年、児童福祉法による保育所の認可を受け、1952 年には児童数が増え、対岸の小瀬戸地区に小百合園を開園する（神ノ島小教区史 70-5 頁）

②木鉢教会

明治後期に小瀬戸（網場ノ脇）・木鉢に移住した

信徒は、主日のミサに参加するため対岸の神ノ島の教会に渡っていた。移住の信徒世帯が増加し、1900年代初めには小瀬戸（網場ノ脇）に15世帯、木鉢に11世帯になる。神ノ島教会の守山神父が教会の設立を主導し、世帯数の多い小瀬戸に教会を設立する。1909（明治42）年、神ノ島教会主任司祭のデュラン神父の多額の資金と信徒の奉仕で網場ノ脇教会が設立される（カトリック教報43号1930年8月）。一方、『木鉢教会創設50周年記念誌』によれば、当時の世帯は網場ノ脇10世帯（宿老岩崎吉三）、木鉢8世帯（宿老鶴田与三右エ門）とされる。網場ノ脇教会は、坂の上の木造瓦葺高屋根の小さな聖堂であったという（22頁）。

1930（昭和5）年、網場ノ脇は9世帯にとどまる一方で、木鉢は60世帯に増加し、「この教會に集まる信者は殆ど全部が木鉢」（カトリック教報43号1930年8月）という状況になる。長崎教区（司教）主導によって、交通の便のよい木鉢浦の丘陵地に新教会建設を計画し、木鉢浦の信徒の土地を購入する。1938（昭和13）年に献堂式と小柵小学校で祝賀会が行なわれる。

1945年には長崎原爆の爆風で、木鉢教会は倒壊寸前の状態になり、翌年、教会の修理にとりかかる。



木鉢教会

1962年、木鉢教会は、神ノ島の巡回教会から独立する。6年後に教会の増改築工事を行ない、1976年に信徒会館を建築する。

さらに、1979年の信徒総会で「聖堂建設50周年記念行事」の一環として、屋根瓦の吹き替え工事を行なうことにする。細部にわたる不良箇所を点検したところ、建物が耐用年数を超え全面的な建て替えが必要と判断し、信徒総会で新教会の建設が決定される。1981年に新教会は完成し、建設費は8500万円、一世帯あたり供出金は62万円であった（木鉢教会創設50周年記念誌29-43頁）。なお旧福田村の岳教会（集会所）は、1956年に飽ノ浦小教区所属に変更となる。

昭和7年（1932）1月5日、木鉢の一本松に女部屋が設立され、1935昭和（10）年に前項でふれた保育所が丘の上に開設される。この時期、日曜日のミサのために信徒が交代で保育所のオルガンを網場ノ脇教会まで担いだという。

木鉢教会の信徒組織は、1967年に使徒信徒職協議会体制となり、会長・副会長・書記が選出され、さらに委員5名の合計8名で協議会が構成される。信徒組織の地区割りは、網場ノ脇・小瀬戸1区・小瀬戸2区・木鉢浦1区・木鉢浦2区・上矢草1区・上矢草2区・下矢草1区・下矢草2区・本郷・住宅・一本松1区・一本松2区・新丁場で、現在は新興団地のみなど坂等が加わっている。木鉢教会の信徒団体として、青年会・婦人会が存在する（木鉢教会創設50周年記念誌59-77頁）。

木鉢教会の信徒世帯の墓地は、網場ノ脇教会跡地を網場ノ脇墓地として整地しカトリック信徒と仏教徒用の墓地とする。その後、信徒数が増加し、網場ノ脇墓地では不足となり、1921（大正10）年頃から一本松に共同墓地を造成する（木鉢教会創設50周年記念誌102頁）。

山間地における宗教コミュニティの形成と展開

長崎市南部に位置する小ヶ倉地区大山・深堀地区善長谷の信徒集落における宗教コミュニティの形成の経緯と展開を見ていこう。

①大山教会

明治初期、浦上教会・神ノ島教会・伊王島（馬込）教会と長崎市に教会堂が設立されていく様子に接し、大山の信徒は教会を建てたいという思いにか

られる。初代の大山教会は1880～1882年（明治13～15）年頃、大浦教会主任司祭のエミール・ラゲ神父の主導である。しかし確かな資料はなく、長老の話では、14, 5坪数の小さな洋館で、実際は、信徒集会所として建てられたものという（大山小教区史150年の歩み18頁）。

一方、大山教会主任司祭の三村誠一神父によれば、初代教会は、信徒が自分の家を寄付した民家御堂であるという。

この時期の信仰生活の一端が、三村誠一神父の話からうかがえる。当時、大山では、子どもが誕生すると大浦教会で受洗させている。神父が洗礼台帳を調べると、当時の子ども半数以上が誕生日と洗礼日が同一日である。乳児死亡率が高かったという事情があるものの、出産した母親以外の親族が歩いて6km離れた大浦教会に子どもを連れて行き受洗させたという。

1895（明治28）年に2代目教会が、デュラン神父の主導で建設される。2代目教会の土地は、初代教会横の土地を整地・石組みしたものである。瓦屋根で窓はステンドグラスで、現在の教会の上の広仁田に建設される。初代教会は新たに和室2間が増築され司祭館として使用される（大山小教区史150年の歩み18頁）。三村神父によれば、2代目教会の土地は信徒が寄附したものである。教会らしい教会として2代目教会は建設されたものという。

2代目教会は、明治・大正・昭和と長い間、使用される。しかし第二次世界大戦後、信徒の急増と老朽化のために建て替えが求められるようになる。さらに急増する信徒数を2代目教会の敷地では収容できないため、当時の教会顧問が現在の教会が立地する土地を提供する。終戦から6年目の物不足の時代に、資材は教会が所有していた山の木材を使用し、一世帯1人と日曜日は中学生以上の総出の労働奉仕によって、敷地300坪、建坪60坪の3代目教会が完成する（大山小教区史150年の歩み18-19頁）。三村神父によれば、この3代目教会の敷地は、畑と傾斜地を削って整地したものであるという。

『カトリック教報』336号（1952年7月）には、大山教会が「全国でも珍しい近代建築様式の聖堂として注目されていた……。文部省文化保護委員会で、国宝建造物の補修や保存に従事してられる文部技官……の設計である」と紹介され、さらに「大山は

45戸300人の信者部落ですがよるこんで180萬圓の工費を負担し、更に努力奉仕に出動するなど……まことに感激すべきものでした」という主任司祭の岩永六郎神父の話が掲載されている。

岩永神父の話から、3代目教会が大山教会の信徒の経済的負担で建設されたことが分かる。また2代目教会の敷地は、3代目教会の敷地を提供した信徒に寄贈される（大山小教区史150年の歩み19-20頁）。

1978年に大山教会は、大浦教会から小教区として独立する。

さらに、3代目教会を建設して40年がたち、部分的な修理では十分対応できず建物の亀裂が目立つようになり、信徒世帯に教会建設のアンケートを実施し、その上で1990年に4代目教会が総工費6500万円で建設される。

お告げのマリア修道会大山修道院は、1928（昭和3）年に長崎司教となった早坂司教の意向を受けた大浦教会主任司祭の西田神父の指導で、同年2人で発足する。教会の奉仕活動と生活のための農耕や行商を行なう中で会員も増加していく。1953年に精米所を開業し、1961年には、西田神父の尽力で大山に長崎市立僻地保育所が開設され、信徒が運営を担



大山教会

当する。

②善長谷教会

明治初期、外国人神父が善長谷に入り、宣教のため1軒1軒を回る。その結果、氏子である八幡神社との関係に苦慮しながらも1人を除きこぞって受洗する。最後の1人も親族の説得で受洗したという。禁教令の高札の取り下げ後、古い民家を改造して教会が設立される（善長谷教会献堂60周年3・15頁）。民家御堂あるいは仮教会（聖堂）と推測される。この当時は、集会時にほら貝を鐘の代用にしたという。

第二次世界大戦後、建物の老朽化がひどくなり、長谷川又助宅が民家御堂とされる。この民家に中町教会の古川神父がミサのために訪問する。当時、古川神父は善長谷で馬を持ち、信徒が世話をしていたという（善長谷教会献堂60周年18頁）。

教会の新築が必要になり、信徒の金銭的負担と労働奉仕で建築を開始する。男性信徒が山から石を担ぎ下ろし、1世帯当たり4斗樽分の砂利を海岸から運搬する（善長谷教会献堂60周年25頁）。

『カトリック教報』335号（1952年6月）によれば、総工費171万円で、母組の信徒は「祭壇だけなりと私たちの手で捧げよう」と草履造りやツワの販売で5万円以上を寄付し、集落外の信徒からの寄附もあった。1952年に建坪45坪、鉄筋コンクリート造りの善長谷教会が設立される。当時、善長谷は西中町教会（現在の中町教会）の管轄で、西中町教会主任司祭が「50世帯足らずの信者たちがよくもこの立派な教会を建て上げてくれました」と語っている。

現在、善長谷教会は深堀教会の巡回教会で、日曜日の早朝に深堀教会の主任司祭が訪問して、主日のミサが行われている。



善長谷教会

島嶼（伊王島）における宗教コミュニティの形成と展開

長崎市の島嶼地域では、明治期の宗教コミュニティの形成に外国人神父の果たした役割は大きい。また伊王島地区では大明寺教会と馬込教会の間で主教会・巡回教会の位置づけが変更する。

①馬込教会

1971（明治4）年、馬込集落の20世帯の信徒が椎山に教会を設立する。仮教会と見られ、浦上の秘密教会以外では一番早くできたものとされる（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ3頁）。その後、1888（明治21）年に赴任したヨゼフ・フェルディナン・マルマン神父は、「赴任早々メジロ籠大の聖堂模型を持ってきて、これで見堂を立てる」と話していたという（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ16頁）。この話から、馬込教会の設立がマルマン神父の主導と判明する。教会の敷地は数人の信徒が寄贈している。

1890（明治23）年、馬込集落向イに漆喰建ゴシック様式の通称「白亜の天主堂」が建設される。さらに1892（明治25）年、エドアル・デュラン神父の時、長崎港外の小教区の主教会が大明寺教会から馬込教会に変更し、デュラン神父が主任司祭として定住する。

昭和初期（1927・1930年）、台風の被害がつづき教会の尖塔が吹き倒され、修理の見込みが立たなくなる。邦人司祭が教会の新築を計画し、1931（昭和6）年、鉄筋コンクリート、ゴシック様式の教会（建坪105坪）の教会が建設される。総工費は3万5千円で、信徒の金銭的負担と労働奉仕に加えて、全世界から相当の寄付があったという。また三菱高島工業所が工事用のコンクリートミキサーを無償で貸し出している。

馬込教会の関連施設に関して、1930（大正15・昭和元）年に浜辺に青年クラブが設立される。高嶋炭鉱に建設された長屋が廃坑や不況のために入居者のないままに競売となり、松岡孫四郎神父が1棟を安く落札し、馬込の青年らに解体させて運ばせて青年クラブの施設を建設する。

同時期に深堀の民家の建物を買収して、共同園屋敷に女部屋が設立される。1929（昭和4年）、さらに鉄筋コンクリート2階建ての施設を新築する。馬

込共同園は、1911（明治44）年、デュラン神父の時、貧困者の救済と子女の教育を目的に開設され、太田エンら5人が民家で共同生活を開始したことに由来する。その後、信徒の尽力で土地を得て共同園屋敷に移る。女部屋は新築を機に組織化され、この会に馬込と大明寺の女性が畑持参で参加する。女部屋の子教育は、第二次世界大戦中に伊王島幼稚園に展開し、終戦の翌年、厚生大臣から保育所として許可を受ける（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ18-29頁）。

また、昭和初期、活動修道会の聖ヴィンセンシオ会が伊王島で臨時無料診療所を開設している。当時、伊王島では開業医は1人のみで、類縁（宗教）関係に基づく対応であったといえよう（カトリック教報94号1932年9月）。

②大明寺教会

大明寺教会は、1880（明治13）年、オーグスト・ブレル神父の主導で設立される（伊王島町カトリック馬込小教区100年のあゆみ8頁）。ゴシック様式の建物で、献堂式はブレル神父かエミール・ラゲ神父の時かは不明である。大明寺教会の設立は馬込教会の設立前で、明治初期に大明寺が長崎港沖の宣教拠点に選ばれていたことが判明する。しかし明治中期、馬込教会の建設で、主教会が大明寺教会から馬込教会に移行する。

昭和20年代後半、老朽化した教会の新築を目的に、建設委員会を設立し建設積立金（月額1世帯100円）を開始する。その後、月縦筋は300円・500円と増額し、積立金は2000万円に達する。『カトリック教報』389号（1957年4月）に「伊王島大明寺教会は教区でも最も古い建築の一つで腐朽がひどく、改築準備中であるが、敷地は『地藏鼻』に選り、60坪の土地を買収、登記を終わった」とある。

その後、昭和40年代に入り、1973年、教会が新築される。敷地は旧教会とほぼ同じ場所で、鉄筋コンクリート2階建て、階下集会所、階上聖堂である。総工事費3800万円で、1600万円が大明寺教会の信徒以外の寄付金である。そのうち700万円は大明寺教会に直接関係のない信徒・未信者の寄付であった。伊王島鉱業所からも数度寄付金があり、日鉄伊王島炭鉱の閉山時（1972年）、従業員の信徒が退職金で、積立金対応金を一時払いで支払ったことも大きかったという（伊王島町カトリック馬込小教区100年の

あゆみ21-2頁）。なお旧教会堂は、博物館明治村に移築されている。

5 長崎市（半島・山間地・島嶼）への信徒の移住と宗教コミュニティ形成

ここまで長崎市（南東・山間地・島嶼地域）への信徒の移住と定住、宗教コミュニティの形成を明らかにした。最後に、長崎市への信徒の移住と定住および他出、さらに宗教コミュニティの形成の社会的特徴を検討する。

長崎市（半島・山間地・島嶼）における移住と定住の社会的特徴

まず、長崎市への信徒の移住と定住、他出に関する特徴を明らかにしたい。

第1は、長崎市内の移住地が、いずれも条件不利地であった点である。長らく陸の孤島と呼ばれた半島や交通の不便な山間地、島嶼地域で、昭和以降に長崎市に編入された周辺地である。信徒の移住は江戸後期で、神ノ島は先住の仏教徒が居住し、大山・善長谷は付近の村の所有地、伊王島は港附近が佐賀藩の遠見番所と仏教徒の居住地である。いずれも旧佐賀藩領で外海地区の佐賀藩領からの移住で、佐賀藩の開拓政策の関与が推測される。また農業に適さない土地の購入や開拓地への入植は安価あるは賦役が生じるものの土地購入の費用が不要なことや信仰の秘匿に有利であったことが理由といえよう。また大山以外では漁労に従事することができた点が定住に有利となる。

第2は、いずれの地でも連鎖的移動が生じ、世帯が増加した点である。外海地区の移住の後に五島・平戸島からの移住が生じる。その結果、神ノ島は仏教集落を超えて対岸の網場ノ脇（小瀬戸）に居住が展開し、さらに木鉢に広がる。大山・善長谷は初期の移住地の下側に居住が広がり、伊王島では新たな開拓地に移住が生じる。

第3は、その一方で、大山の事例を見れば、早期から他出が発生している点である。しかし、大半が長崎市内とりわけ大山の近辺である。長崎市の都市化・工業化によって、非農業の世帯が生活および就業に便利な周辺地に移住したと推測され、宗教コミュニティの拡大と見ることもできよう。

長崎市（半島・山間地・島嶼）における
宗教コミュニティの形成の社会的特徴

次に、長崎市における宗教コミュニティの形成と展開の特徴を明らかにしたい。

第1は、初期の教会設立における集落の信徒以外の関与が大きな点である。早期に設立された半島の神ノ島教会・島嶼の大明寺教会は、表13のように、外国人神父主導である。神ノ島教会の場合、明治初期に仮教会が設立され、5年後に教会が設立される。大明寺教会の設立はさらに早く、長崎湾外の信徒増加に対応し拠点の設立を急いだものと推測される。第二次世界大戦前の木鉢教会の設立は、邦人司教の主導による。邦人最初の司教になった早坂久之助はとりわけ教会設立に積極的で、実際、「土木にも多大の趣味を持ち、最近では港外神の島に傳道館を建築し、その工事監督の爲め、終始往復されて居た」（カトリック教報122号1933年11月）という。

第2は、宗教コミュニティの展開が多様なことである。小榊地区の場合、神ノ島における宗教コミュニティが対岸の小瀬戸、さらに木鉢に展開する。まず小瀬戸に教会が設立されるものの木鉢の世帯増加に伴い木鉢に教会が移転し、その後、神ノ島から独立する。すなわち信徒の増加に伴う小教区の分化が生じる。一方、伊王島地区の場合、主教会が馬込教会に転じる。馬込教会は、当初、信徒主導の仮教会であったものの、外国人神父主導によって教会が設立される。実際、馬込教会の信徒世帯数が大明寺の世帯を上回る状況になる。山間地の大山の場合、分家世帯や来住世帯が増加し、山の下層および周辺に居住が展開し、宗教コミュニティの地理的範囲が拡大する。善長谷教会も同様である。

第3に、宗教コミュニティ形成における信徒の役割が大きいことである。民家御堂・仮教会の段階に加えて、外国人神父主導の教会設立でも土地提供等の分担が見られる。こうした土地の提供は、営農志向の移住地の特徴の一つである。さらに新教会の建設や教会の修理・増築の段階になると、信徒の主導に移る。しかし信徒規模が大きくなり、経済的・労働的負担が相

表13 長崎市半島・山間地・島嶼における宗教コミュニティの形成

地区	教会	民家御堂・仮教会		教会		教会・修繕等		設立年		教会・修繕等		設立年		付設の施設等
		主導者等	設立年	教会	主導者等	教会・修繕等	設立年	主導者等	教会・修繕等	設立年	主導者等	教会・修繕等	設立年	
小榊	神ノ島教会	仮教会 ブレレル神父	1876年	教会1 ラゲ神父	1881年頃	大改築 デュラン神父・信徒	1892年頃	修理	1920年	修理	1920年	昭和初期に3回修理	明治初期に小学校設立 昭和初期に女部屋設立	
	木鉢教会	—	—	(網場/脇)教会1 邦人司教主導・デュラン神父資金	1909年	木鉢教会2 司教主導	1938年	小教区 6年後に増築	1962年	小教区	1962年	教会2 信徒	昭和初期に女部屋設立 昭和初期に保育所開設	
小ヶ倉 深堀	大山教会	仮教会 ラゲ神父	1880年頃	教会1 デュラン神父・土地は信徒寄贈	1895年	教会2 信徒	1952年	小教区	1978年	小教区	1978年	教会3 信徒	昭和初期に女子修道院 昭和初期に保育園開設	
	善長谷教会	仮教会 信徒	明治初期	民家御堂 信徒	戦後	教会1 信徒	1952年	—	—	—	—	—	(西)中町教会・香焼教会 の巡回教会から深堀教会の 巡回教会に変更する。	
伊王島	馬込教会	仮教会 信徒(20世帯)	1871年	教会1 マルマン神父	1890年	教会2 信徒	1931年	—	—	—	—	—	共同園(女部屋・託児施設) 大正末、青年クラブ	
	大明寺教会	—	—	教会1 ブレレル神父	1880年	教会2 信徒	1973年	—	—	—	—	—	炭鉱関係の寄付と従業員の 罪岳金支払い。	

当のものとなる。そのため善長谷教会のように仮教会から新教会の設立の間に民家御堂に戻る場合もある。

なお、本稿が平成 24 年度～ 28 年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号 24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

注

- (1) 実際は、地区長を担当しない世帯があるため、昭和期以降の移住世帯はさらに多いと推測される。
- (2) 大山教会主任司祭三村誠一神父への聞き取り調査は、2016 年 7 月に実施した。

文献

カトリック深堀教会広報員会、善長谷教会献堂 60 年—先人達の想いを胸に一、深堀小教区
江口源一、カトリック馬込小教区 100 年のあゆみ、カト

リック馬込小教区 100 年のあゆみ実行委員会、1981 年。
50 周年記念誌編集委員会、木鉢教会創設 50 周年記念誌 木鉢カトリック教会、1988 年。
濱本清利、小ヶ倉のあゆみ—小ヶ倉小学校創設百周年記念誌、創立百周年記念事業実行委員会、1978 年。
伊王島町教育委員会、伊王島町郷土誌、伊王島町 1972 年。
松村菅和・女子カルメル修道会、パリ外国宣教会年次報告 1（1846-1893）、聖母の騎士社、1996 年。
村岡正晴、神ノ島小教区史、300 年の歩み—神ノ島教会建立 100 周年記念—神ノ島カトリック教会、1995 年。
長崎市編入 50 周年記念行事実行委員会、小榊、小榊連合自治会、1988 年。
長崎市史編さん委員会、新長崎市史 第 3 巻近代篇、2014 年。
中尾正美、郷土史深堀（増刊）、長崎市深堀地区連合自治会、1987 年。
下山盛朗、大山小教区史 150 年の歩み（1844-1994）、大山カトリック教会、1994 年。